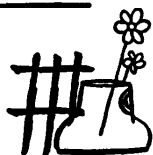


巻頭言



情報処理学会会員の特典

小 泉 寿 男†



本会学会誌の特集号を、仕事仲間の輪講会素材として使ったら非常に勉強になったということを、最近、社内で聞き、学会の活用の例としてうれしく思った。

本会会員数は、今年6月で2万8千名、年間2千名増の規模になり、65年度には創立30周年を迎える。よろこばしいことと同時に、学会運営の重要さを痛感する。会員の多くが、本会に入会してよかったと感じ、自分の業務活動、自己研鑽に役立ち、何んらかの特典になっていることが、本会運営の基本であるべきだからである。

毎年、春秋2回開催される全国大会には、各回とも千数百件の論文が発表される。分野は基礎研究から応用まで及び、登壇者の平均年齢も26歳と若い。各会場での熱気ある発表・討論に接して情報処理分野最先端の躍動を感じる。全国大会や支部大会は、会員の成果発表の場であり、技術のトレンドと担当分野の具体例を知る最も手近な場である。ここに参画できることは会員の特典の一つである。

研究会活動は、20の専門分野に及び、約9千名の登録者をもち、年間約百回の研究会が開催され、第一線の研究成果が発表されている。会員は専門分野における自己研鑽、相互研鑽の場として活躍、活用できる。専門仲間として、産学の枠を越えて情報交流を継続できることは大きな特典であり、でき上がった人脈は会員の財産の一つであろう。本会には、シンポジウム、講習会を積極的に開催している。技術進歩が著しいテーマ、技術基盤として定着しつつあるテーマが選ばれ、第一級の研究者、実務経験者が講師となり、研究開発マインドと人間性のにじみ出る講義が行われる。

学会誌は、会員全員が活用できる情報源であり、知識吸収の素材である。70余名の編集委員によって特集テーマが選ばれ、第一線の識者の執筆による特集号は、最新知識を提供し、前述のような仕事仲間の相互研鑽の素材としての活用もできる。利用次第では、最も大きな会員の特典になりうる。論文誌を読んで、骨

子を理解したときのよろこびは大きい。また、論文誌への投稿は、ライフワークの成果を世に問う貴重な場である。

本会の特長の一つに、国際活動がある。IFIP (情報処理国際連合)、ACM (Association for Computing Machinery)、IEEE-Computer Society などの国際的学术交流を積極的に行い、国際会議を数多く日本で開催している。会員は、国際会議への出席と研究成果発表ができる。情報処理に関する規格標準化については、情報規格調査会が国際機関への対応を行っており、会員は、技術標準状況を把握できる。

以上のように、本会会員としての活躍の場、活用の素材は、学会誌・論文誌、全国大会・支部大会、研究会、シンポジウム・講習会、国際会議、情報処理規格標準化等多様であり、自ら参画意識をもって臨めば大きな特典となり、一方、見過ごすか、受身で臨めば、単なる形式的特典にとどまる。

学会運営の課題も多くある。会員の平均年齢は、3年前35歳であったが、今年4月時は32歳と、毎年1歳ずつ若くなっている。会員層も、大学の研究者から企業の新人社員、情報処理分野以外から転向したばかりの技術者に至るまで幅広い。会員のマジョリティを考慮した運営方法も課題であり、研究会の自主運営性拡大、全国大会の規模増大に対応した運営、環太平洋域を含めた国際活動、会員サービスのための事務局体制・OA化、財務の改善も課題である。各々、着実に前進させていくことが肝要と考える。

本学会が、会員の意見と要望を反映して方向づけを行い、情報処理の潮流として成長していくことは、情報化社会のためにも好ましいことであり、会員は、さらに新たな特典を得るチャンスを得る。特典は特権でもなく、与えられるものばかりではない。自己研鑽と参画意識をベースに、自ら特典をつくりだしていくものであろう。この関係が本学会発展の基盤と言えよう。

† 本会理事 三菱電機(株)

(昭和63年7月26日)